

ブレイディみかこ著『私労働小説 ザ・シット・ジョブ』KADOKAWA（2023年）

本書は著者の眼を通して見たイギリスのシット・ジョブの世界と、シット・ジョブに従事する労働者の未来像について、小説の形を通して紹介し考察したものである。しかし、小説と称しているが、実際の書き方はノンフィクションに近い。それ以上に、著者の近年の執筆活動を考えると、その主張の原点ともいべき半生の自伝と思われる。

なお、本書を紹介する筆者と著者のブレイディみかこ氏とは共通する点がある。それは二人ともイギリス渡航を目指した20代前半の時に、その資金稼ぎのため手っ取り早く水商売に入ったことである。筆者はウェイターとして、ブレイディみかこ氏はホステスとして。著者の体験は本書の第1話「一九八五年の夏、あたしたちはハタチだった」に、「年齢と美醜で判断されて、失礼な言葉や態度を許容することでお金をもらっている」仕事として紹介されている。もうひとつの共通点は、イギリスで二人ともシット・ジョブに従事していたことである。

本書におけるシット・ジョブとは、店員、作業員、ベビーシッター、配達員、介護従事者、保育士、夜勤従事者など重労働で低賃金の「くそみたいに報われない仕事」に従事する人たちが、自らを自虐的に表現した言葉である。シットみたいな時給、シットみたいにきつく、シットみたいに扱われる仕事。

本書で活写された職場の人物とストーリーがすべて著者の体験、見聞したものかどうかはわからない。著者自身も本書がフィクションで、ノンフィクション、自伝ではないとあとがきで明言している。しかし、筆者の体験から実際にこうしたシット・ジョブの現場があると考えるべきだし、また、そう考えて読むとイギリスにおけるシット・ジョブの実態がわかってきわめて興味深い。

筆者が著者のストーリーにリアリティを感じるのは、筆者が1年近くいたロンドンの不法就労の体験から実話に近いと認識しているからだ。1970年代後半のロンドン滞在中に従事した筆者のシット・ジョブは、1週間契約のホテルとして利用されるフラットの清掃だった。フラットの滞在者は主にアラブ諸国から病気治療のためにイギリスの病院に来た人たちである。1日4時間労働で無休、有給休暇もなしという仕事だった。

口約束で職務はフラット内の清掃とされていながら、文書として就労条件が明示されていないことをいいことに、早朝のゴミ出し業務や旅行用ボックスの運搬など通常の清掃以外の業務を強制するようになった。そこで時間外手当の支給を要求したところマネージャーは支払いを拒否、私も大声を出して強く支払いを要求した。あまりの剣幕にマネージャーも思わず電話に手が伸びたが（警察？）、私が不法就労のため彼自身も困ることにもなり電話することはなかった。結局、お互い言い合いの中、時間外手当は支給されることはなく話し合いは終了した。筆者の人生における最初にして最後の「階級闘争」、「労働争議」の敗北である。しばらくした後、解雇された。こうした経験から本書で描かれたシット・ジョブに従事する人間の状況や悔しさを理解できるのである。

ところで本書では、著者が体験もしくは見聞した職種として、住み込みのナニー、衣服販売員、クリーニング工場作業員、衣服のリサイクルボランティア、見習い保育士、日系企業の社員食堂調

理人、看護師、介護士などの仕事が紹介されている。ひとつひとつの逸話はきわめて興味深く、と同時に、考えさせられた。

本書ではシット・ジョブに従事する人たちの矛盾した状況をステレオタイプ的に区分せず、丁寧に表現している。

住み込みのナニーに用意された薄暗い地下の部屋と、約束を超えて際限なく増えていく家事労働。筆者も同じような部屋に居住していた。著者にとって屈辱的なのは、地下から上の階ではナニーは食事してはいけないと雇用主の子どもたちにまで染みこんだ階級意識だった。

自分に似合わない服を無理矢理買わされて、それを泣く泣く着てお店に立つ屈辱。

最低賃金に近い保育士賃金の半分で働く見習い保育士でありながら、労働者階級出身の彼女の言葉遣いを咎めて懲戒処分の対象とするミドルクラス所属のオーナー一族。見習い保育士の「彼女もまた、声を出さずに泣く階級の子どものひとりだった」。

英語をまったく学ぼうとしない日本食スーパーで働く日本人男性従業員。彼らは日本人の女性従業員すら嘲笑の対象にする。彼らは年齢の高さや未熟な職業経験から日本に「帰れない人たち」、「帰りたくなっても帰れなくなっている人たち」なのに。そんな職場の社員食堂で調理人として働いていると「人間としてどんどん低い者になっていく」という。それは「ソウルによくない仕事」だからだ。そんなところならやめた方がいい。「自分を愛するってことは、絶えざる闘い」だ。

清掃人や料理人、看護師や介護士など「他者のニーズを直接ケアする人々」、すなわち「ケア労働者」が社会に厳然として存在している。一方、こうした仕事に従事しながら家庭で家族のニーズを満たす女性は「二重の意味で労働者階級」だという。そして、労働者階級とは女性を指す言葉かもしれないとまで言い切っている。

著者はデヴィッド・グレーバーの著書『ブルシット・ジョブ』を思想的背景に、本書執筆の動機として「これらの仕事はいつまでも報われないままでいいのかという疑問」があったという。

そして、本書の最後にシット・ジョブに従事する人々の社会的地位を回復させる「労働に対する価値観の根本的なシフトがすでに始まっている」と主張する。

確かに新型コロナ危機はエッセンシャル・ワーカーの役割と価値を見直すきっかけになった。社会に不可欠な仕事に従事しているながら、報われない待遇に不安を抱えている人たちに光が当たったのである。しかし、コロナ禍後、少なくとも日本ではエッセンシャル・ワーカー全体の労働条件や待遇の見直しが大きく進められたことは確認できない。著者の期待に反して、資本主義のメカニズムは依然として強固である。

また、イギリスは日本とは異なりジェンダー、社会階層の問題に加え、身分・階級、人種・民族の要因が複雑に絡まっている。さらに現代では移民の問題も大きい。身分・階級意識の強いイギリスのシット・ジョブの現実を単純に日本に当てはめることはできない。

しかし、小説として自伝風に面白く読むことができ、また、色々なテーマを考えさせてくれる本書のご一読をお勧めする。読了後、自分自身の「シット・ジョブ」小説をいつか書いてみたいと思った。(西村 博史)